

古文書にみる

病と薬

Diseases and Medicines
seen in
ancient documents

慶應義塾大学文学部古文書室
2023年度 企画展

開催にあたって

慶應義塾大学文学部教授・古文書室長 小山幸伸

およそ3年間、世界を席卷したCOVID-19がようやく収束をむかえた2023年度に、改めて「病」と「薬」についての歴史を振り返ることには意義があると思われます。歴史上、人類は、天然痘やペスト、コレラなど多くの「病」に曝されて来ました。それらを全て克服したわけではないですが、「病」を克服するために、「薬」について長年調査・研究を継続して来たことは、人類の貴重な営みといえるでしょう。

そのような人類の営みを、古文書を通して確認し、人々はどのように「病」と戦い、どのような「薬」を手に入れたのかを知ることで、人間社会の一端を明らかにしていきたいと考えました。

慶應義塾大学文学部古文書室が所蔵する古文書を中心に、江戸時代から明治時代の「病」と「薬」に関する人々の営みを探ることが今回の企画の趣旨です。江戸時代から明治時代に流行し人々を苦しめた病のうち、天然痘、麻疹、コレラを取り上げました。人々がどのように、これらの「病」に対処したのかを、当時の人々が書き残した古文書から紹介したいと思います。現代の医学知識から考えると荒唐無稽に見える迷信の類いもありますが、そこに人々の営みを見出したいと考えています。

その一方で、医学・薬学に関する知識は、古医方と称された漢方医学を中心に、日本に定着し発展していきました。また江戸時代後期には、西洋医学も発展していったのです。そのなかで、本草学として薬学の知識も中国の本草学の影響を受けて普及していきました。中国から伝わった李時珍の著書『本草綱目』を元に日本固有の動植物・鉱物に基づき、日本の本草学が形成されたのです。小野蘭山の『本草綱目啓蒙』など、そのことを示す文献も数多く残されています。その一端を紹介したいと考えています。

本草学に見られるように、前近代における「薬」の中心は薬草でした。野草などを煎じて飲む治療は、民間において古くから行われていました。そのため、江戸幕府は、小石川薬園に代表される幕府直営の薬草園を設置し、医薬行政における役割を担ってました。また、朝鮮人参に代表される海外からの「薬」も、貿易を通じて江戸時代の日本に数多く輸入されていました。日朝貿易における朝鮮人参以外にも、長崎貿易を通して、数々の薬種が輸入されていました。なかには「コーヒー豆」や「阿片」のようなものも輸入されていたことが確認される他、「ミイラ」や「ユニコール(ユニコーン)」のような珍しいものがあったことも分かっています。そのような薬の輸入や、それを取り扱った商人による古文書を紹介したいと考えています。「唐薬種」「西洋薬種」と呼ばれる輸入された薬のほかに、国内で生産された「和薬種」などは、全国的に流通し「薬」を扱う商人も江戸時代を通して増加していき、庶民にも常備薬や旅の携帯用として、「薬」が馴染みのものとなったのです。

このような「病」との戦いや、「薬」の普及を、古文書・古記録から探ることで、おそらく今後も続く人類と「病」との戦いや、「薬」の開発に対し、知恵と勇気を喚起することの一助になれば、これにすぐる幸せはありません。

展示品リスト

展示資料 番号	史料名	所蔵	年代
テーマ1 第Ⅰ部 江戸～明治時代の流行り病			
01	疱瘡神五人相渡申證文事	慶應義塾大学文学部古文書室	(江戸時代中～後期)
02	牛痘小考	慶應義塾図書館	嘉永2年(1849)
03	種痘取調書	慶應義塾大学文学部古文書室	明治8年(1875)
04	(小児種痘に付差紙)	慶應義塾大学文学部古文書室	明治10年(1877)
05	種痘証	慶應義塾大学文学部古文書室	明治29年(1896)
06	乍恐書付を以申上候(麻疹張薬に付)	慶應義塾大学文学部古文書室	享保16年(1731)
07	御尋ニ付以書付奉申上候(代々木村地内麻疹神の由御尋に付)	慶應義塾大学文学部古文書室	享和3年(1803)
08	麻疹戯言	慶應義塾図書館	享和3年(1803)
09	麻疹必用	慶應義塾図書館	文政7年(1824)
10	武江年表 卷之十一	慶應義塾図書館	明治15年(1882)
11	草堂記	慶應義塾大学文学部古文書室	安政4～6年(1857～59)
12	薬法御触書(暴瀉病流行に付)	慶應義塾大学文学部古文書室	安政5年(1858)
13	虎列刺病一件日記	慶應義塾大学文学部古文書室	(明治時代前期)
14	始末御尋ニ付上申仕候(コレラ病流行に付)	慶應義塾大学文学部古文書室	明治12年(1879)
15	虎列刺病予防仮規則	慶應義塾図書館	明治12年(1879)
16	虎烈刺論	慶應義塾図書館	明治4年(1871)
テーマ2 第Ⅱ部 薬学の発展			
17	薬性能毒	慶應義塾図書館	寛永6年(1629)
18	霊宝薬性能毒	慶應義塾図書館	享保5年(1720)
19	和語薬性能毒	慶應義塾図書館	享保18年(1733)
20	和名入 本草綱目	慶應義塾図書館	寛文12年(1672)
21	本草綱目啓蒙	慶應義塾図書館	(江戸時代後期)
22	養生訓	慶應義塾図書館	正徳3年(1713)

展示資料 番号	史料名	所蔵	年代
テーマ3 第Ⅲ部 薬種の輸入と流通			
23	午阿蘭陀相对控	慶應義塾大学文学部古文書室	安政5年(1858)
24	覚(サフラン代金)	慶應義塾大学文学部古文書室	(江戸時代後期)
25	未弍番割浜着勘定覚	慶應義塾大学文学部古文書室	(江戸時代後期)
26	覚(巳弍番割浜着落札貨物ニ付)	慶應義塾大学文学部古文書室	(江戸時代後期)
27	覚(大黄売上一件)	慶應義塾大学文学部古文書室	(江戸時代後期)
28	人形人参	九州国立博物館	正徳3年(1713)
29	通信使記録(朝鮮国王より日本公儀江別幅并三使自分献上物)	慶應義塾図書館(貴重書室)	正徳元年(1711)
30	人参代往古銀	日本銀行金融研究所貨幣博物館	宝永7～正徳4年(1710～1714)
31	人蔘史(第四卷人蔘栽培篇)	慶應義塾図書館	昭和14～15年(1939～40)
32	朝鮮人参耕作記	慶應義塾図書館	寛延元年(1748)
33	江戸名所図会 一巻	慶應義塾図書館	天保5～7年(1834～1836)
34	江戸買物獨案内 巻下	国立国会図書館	文政7年(1824)
35	江戸買物獨案内 巻下	国立国会図書館	文政7年(1824)
36	江戸買物獨案内 巻上	慶應義塾図書館	文政7年(1824)
37	旅行用心集	慶應義塾図書館	文化7年(1810)
38	覚(元結、竹ぼうき、万金丹等代金請取覚)	慶應義塾大学文学部古文書室	(江戸時代後期)
39	武相薬卸帳	慶應義塾大学文学部古文書室	弘化4年(1847)
40	和蘭薬扣帳	慶應義塾大学文学部古文書室	文久元年(1861)
41	久寿理帳	慶應義塾大学文学部古文書室	文久2年(1862)

謝辞

本展開催にあたり、下記の機関より多大なご協力を賜りました。

ここに記して心より感謝申し上げます。(敬称略、五十音順)

江戸東京博物館 慶應義塾大学信濃町メディアセンター 九州国立博物館 東京都公文書館
内藤記念くすり博物館 長崎歴史文化博物館 日本銀行金融研究所貨幣博物館

江戸～明治時代の流行り病

てんねんとう ほうそう ましん
天然痘(疱瘡)、麻疹、コレラなど、江戸時代には様々な流行り病が猛威を振るった。それらはただの自然現象というわけではなく、当時の社会の在り方とも関連していた。すなわち、交通が発達し、都市を中心に人々が密集化したことで、感染のリスクが高まった面もある。

流行り病の被害を踏まえ、8代将軍の徳川吉宗が医学書を普及させる政策を進めたことは有名である。また、民間でも医学書やそれに類する書物が多く出版されていた。こうした書物の知識が各地の医療実践に活かされる場合もあった。

とはいえ、流行り病は当時の人々にとって未知の脅威であり、疱瘡は疫病神としての疱瘡神、麻疹は鬼、コレラは虎・狼・狸(こ・ろ・り)として表象された。流行り病に対し、人々は医学的な対処法だけでなく、百万遍念仏、大般若経転読、社参、その他のおまじないなど、様々な宗教的な対処法を試みた。

病に対する医学と宗教を織り交ぜたような対応は、明治時代以降も確認できる。一方で明治時代には、「衛生」という概念が広がりを見せた。明治8(1875)年、内務省に衛生局が設けられ、医学的側面から人々の生活環境を統制した。当時の民間人にとって「衛生」は、政府の方針と関わって従来の生活様式に改変を迫る力として受け止められた。

以下では、江戸時代における天然痘(疱瘡)・麻疹・コレラの流行の歴史をたどり、明治時代の動向にも目を向けたい。

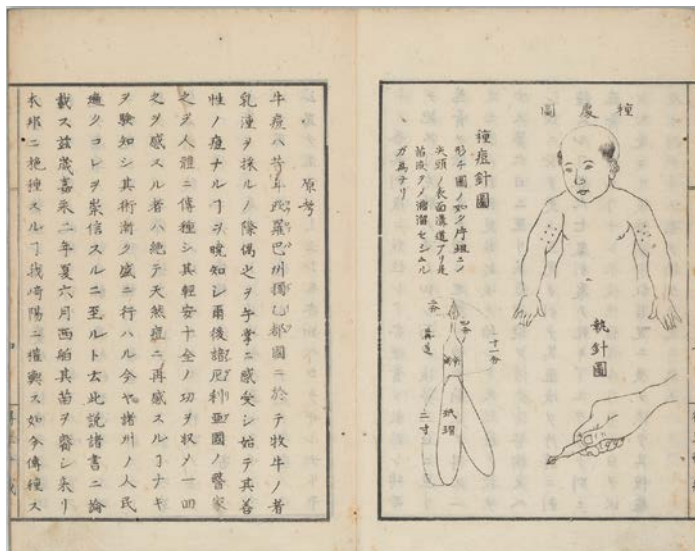
1 天然痘(疱瘡)



1.「疱瘡神五人相渡申證文事」

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵 江戸時代中～後期

「疱瘡神の詫び證文」と呼ばれる文書。長徳3(997)年という平安時代の年号が書かれているが、実際は江戸時代に作成されたもの。疱瘡神5人が若狭国小浜の組屋六郎左衛門宛に出したという体裁で、彼らが痘瘡を流行らせてしまったことを詫び、罹った場合にも重篤には至らせないことを誓っている内容である。この證文は各地で同類のものが見つかり、疫病除けのお札代わりだったと考えられる。



2.『牛痘小考』

慶應義塾図書館所蔵

嘉永2(1849)年

牛痘種痘法はイギリス人医師エドワード・ジェンナーにより考案された天然痘の予防法。牛の天然痘である牛痘に罹った人から膿を取り、健康な人に注射し抗体を持たせる。日本では蘭学医モーニッケにより出島を通じて全国に広まっていった。本書には、針の向きや刺す位置など種痘の詳細が記されている。著者の橋本宗建は佐賀藩藩医で、日本で初めて種痘に成功している。

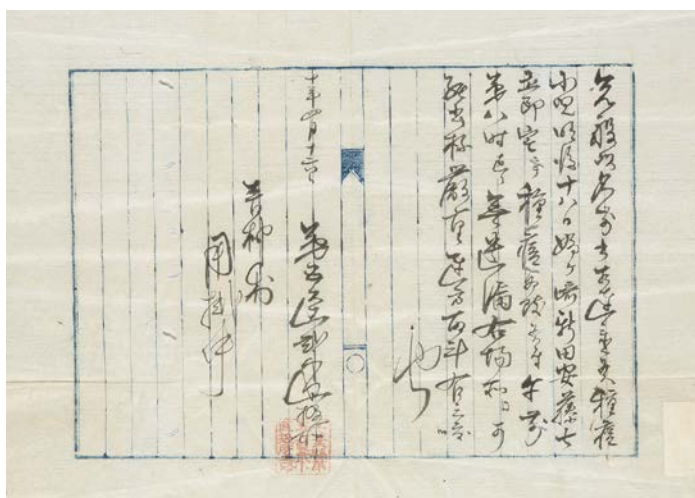


3.「種痘取調書」

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵

明治8(1875)年

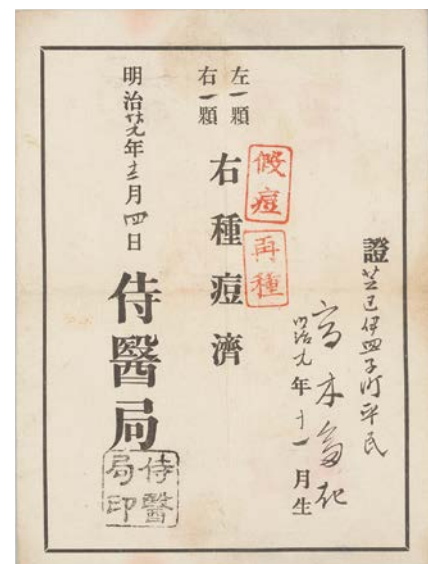
明治期になると政府は「種痘規則」などを布達し、全国的な接種がおこなわれるようになった。本史料からは、村の番地ごとに家族が何歳の時に接種をおこなったかを調査し、村の用掛りに提出していることがわかる。



4.「小児種痘に付差紙」^{さしがみ}

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵 明治10(1877)年

小児に対しても接種はおこなわれた。小児は「出生70日から満1年まで」が接種の最適とされる。村主導で種痘場が設置され、差紙(呼出状)が届いた者から接種が実施された。



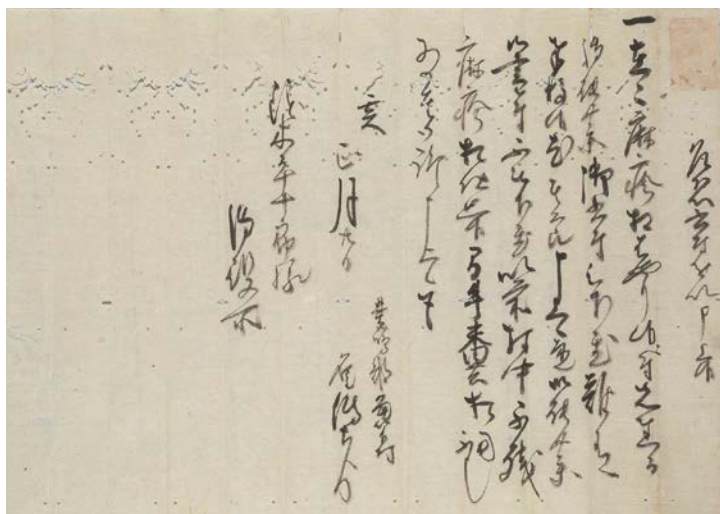
5.「種痘証」

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵

明治29(1896)年

種痘接種をおこなった証明書。実施した6・7日後には効果を確認するが、この証明書には「仮痘」・「再種」と朱印が押されていることから、効果がはっきり出でらず再接種することが命じられたことがわかる。

2 麻疹



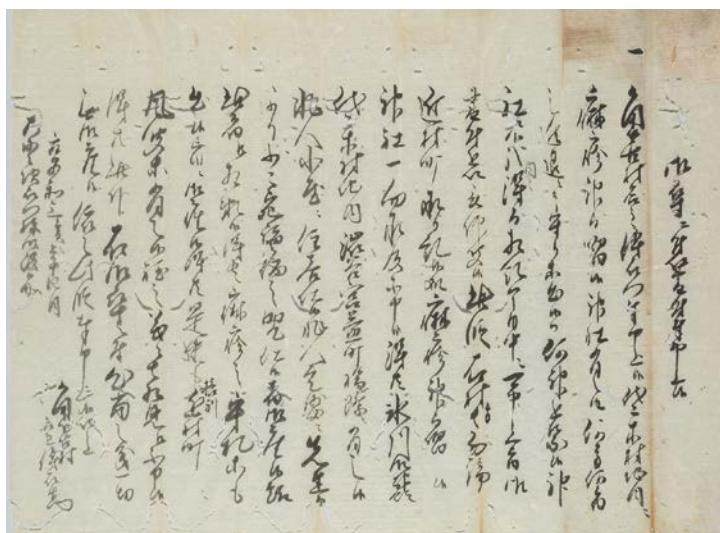
6.「乍恐書付を以申上候」

(麻疹張薬に付)

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵

享保16(1731)年

豊島郡角筈村の名主傳左衛門から代官鈴木平十郎に宛てた麻疹の張り薬に関する史料である。流行に際して、村では牛糞を使用しなかった旨が述べられている。享保15年の麻疹流行に際して、江戸町奉行は「白牛洞」の無料配布を行った。「白牛洞」はヨモギを食べさせた牛の糞を黒焼きにしたもので、内服薬や塗り薬としての使用が推奨されたといわれ、本史料はこれに関連していると考えられる。



7.「御尋二付以書付奉申上候」

(代々木村地内麻疹神の由御尋に付)

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵

享和3(1803)年

代々木村地内にある麻疹神を祭る神社の由来についての代官大貫次右衛門の尋ねに対する名主傳左衛門からの返答書である。角筈村及び、近村町においても麻疹神を祭るような神社は存在しない旨が述べられている。また、近くの非人小屋に麻疹に効果がある守り札を授与する老婆がいるという話もあるが、これも噂話に過ぎない旨が記されている。

8.『麻疹戯言』

慶應義塾図書館所蔵 享和3(1803)年

本書は、享和3年の麻疹流行時の江戸の人々の様子を描いた滑稽本である。展示部分は、麻疹流行時の江戸の町の光景を、中国の町に模したものである。右端の箱に座る男は、麻疹を軽くすると信じられた杵の玩具を手に持ち、頭上の傘からは同じく麻疹を軽くするとされた括り猿がぶら下げられている。また、左端には麻疹のまじないに用いられた多羅葉を売る少年もいる。





9.『麻疹必用』

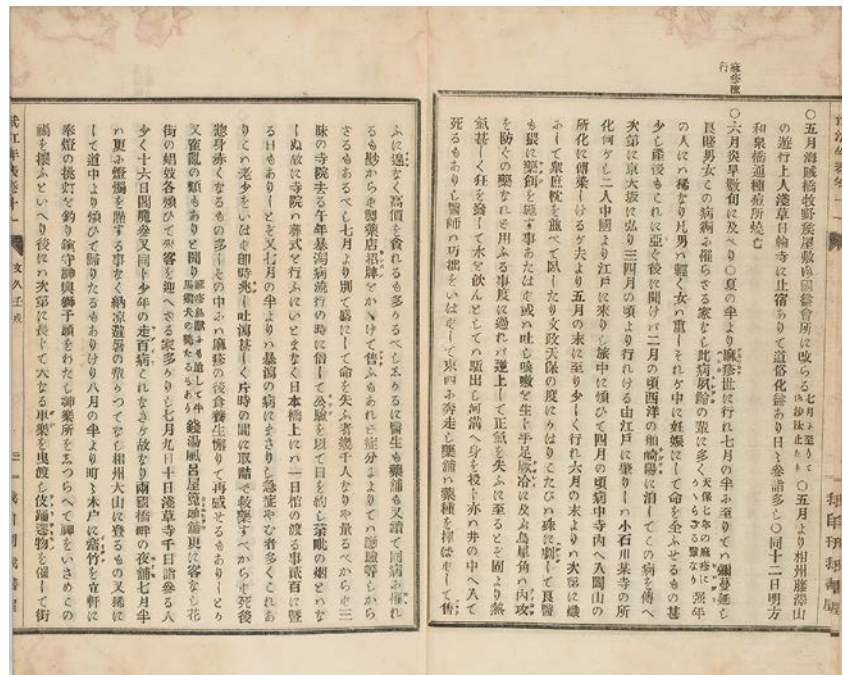
慶應義塾図書館所蔵
文政7(1824)年

葛飾蘆菴による、麻疹に関する養生書である。本書には麻疹の流行史、症状、罹患時の禁忌について記載されている。展示部分は、麻疹の症例が表されている。右図のように発疹の色が紅く潤い、形が尖っていれば治りやすく、左図のように発疹の色が黒く、形が尖っていない場合は重症であるとされた。症状が軽く、発疹などがあまり出ない場合、体内に麻疹の毒が残り、再感染の原因になるとされ、発疹がたくさん出る方がよいとされた。

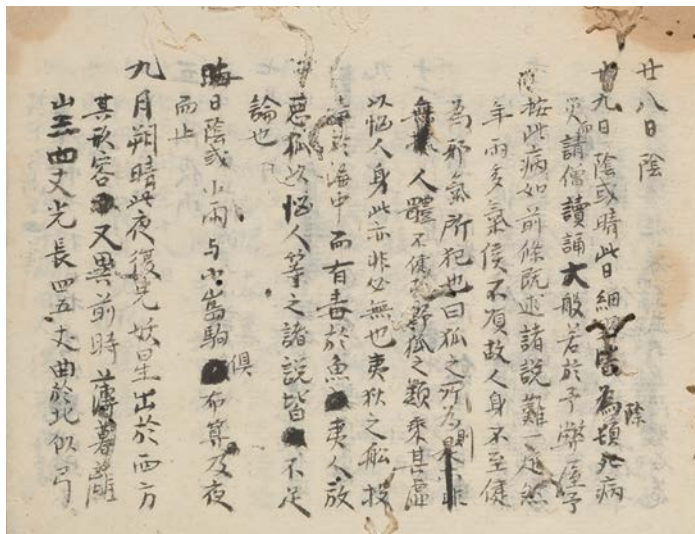
10.『武江年表 卷之十一』

慶應義塾図書館所蔵
明治15(1882)年

文久2(1862)年6月から閏8月にかけて江戸で流行した麻疹について記す。これによれば、この流行は同年2月に長崎停泊中の西洋船から広がり、1、2ヶ月ほどで京大坂、その後江戸にも伝わったとされる。以前の流行時、麻疹に感染していない年若の者が多く感染しており、流行の影響で、銭湯、風呂屋、髪結処は客がなく、花街では娼妓が麻疹を患い、客を入れない家が多い旨、浅草寺の千日詣や大山詣に行く者も少ない旨が記されている。



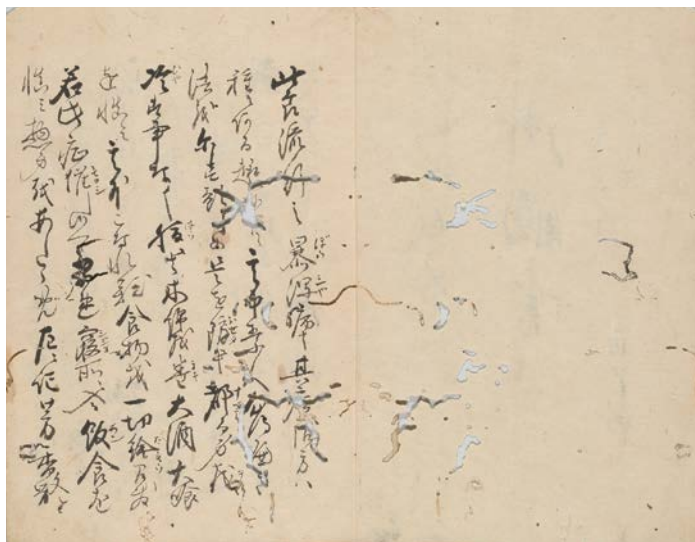
3 コレラ



11.「草堂記」

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵
安政4～6(1857～1859)年

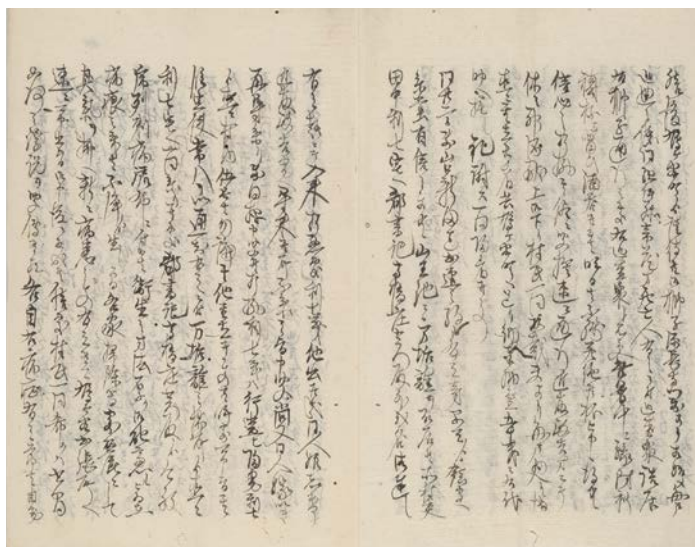
相模国愛甲郡半原【はんばら】村下組の名主を務めた染矢家に伝来した安政期の日記。安政5(1858)年8月13日条では、江戸・小田原・関西・京都などで大勢の人々がにわかになくなったとあり、コレラの流行を指すと思われる。展示部分の同月29日条によれば、細野地区の住民が頓死病災を除くため、僧侶を招いて大般若経を読誦【どくじゅ】している。また、病の原因として天候不順、狐の所為、外国船が海に毒を流した、外国人が悪い狐を放ったなどの諸説が流布したようである。



12.「薬法御触書」(暴瀉病流行に付)

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵
安政5(1858)年

下総国猿島郡百戸【もど】村の名主・組頭を務めた倉持家に伝来した触書の写し。その内容は、安政5(1858)年の暴瀉(コレラ)の流行に際し、幕府が予防法・治療法をまとめて触れ知らせたもので、各地に関連史料が残されている。展示部分では、素人の心得るべき法として、体を冷やさず大酒・大喰を慎むことや、発症した場合は寝床に入って体を温め、芳香散という薬を用いるべきことなどが記されている。その他にも、人々が実践可能な医学的対処法が説明されている。



13.「虎列刺病一件日記」

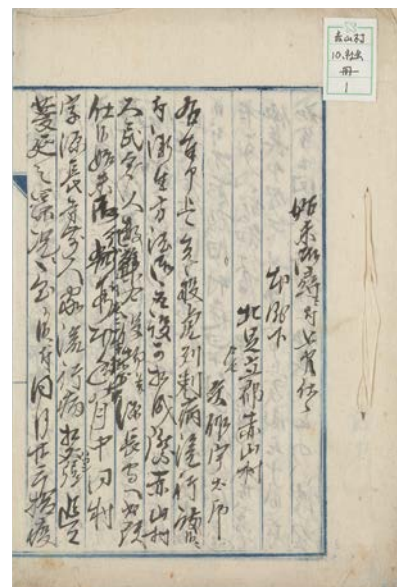
慶應義塾大学文学部古文書室所蔵
明治時代前期

武蔵国足立郡赤山村の村役人を務めた近藤家に伝来した日記。明治期の同村における虎列刺(コレラ)の流行をめぐる動向が、詳細に記録されている。村内では、大般若経転読や社参、万垢離【まんごり】などの宗教的信仰に基づく対策がなされていた。展示部分は、そうした折に郡書記が村吏宅を訪れ、「病痕は不浄より生じるので、各家を掃除して綺麗にして臭気を払い、新たに患者が出たら鳩ヶ谷出張所に申し出るように」といった衛生対策を通達している場面である。

14.「始末御尋ニ付上申仕候」(コレラ病流行に付)

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵 明治12(1879)年

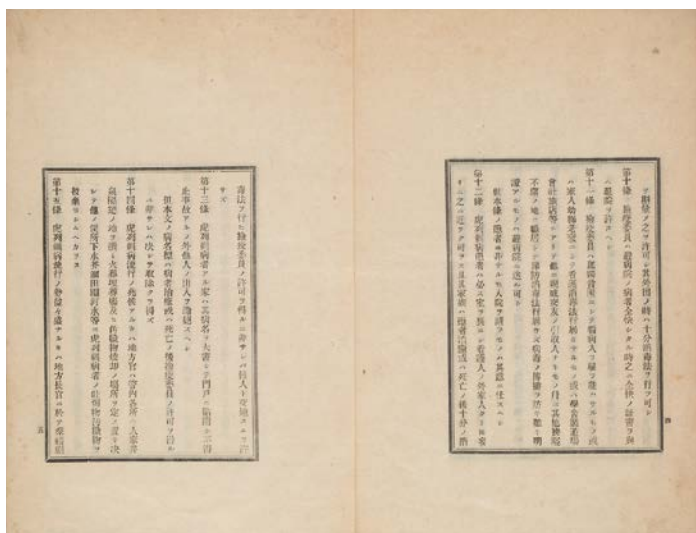
赤山村戸長の矢作宇太郎が、虎列刺(コレラ)流行への衛生対策時における村内の不穏な状況を尋ねられ、明治12(1879)年9月25日付で埼玉県令白根多助に宛てて作成した報告書の写し。村内の源長寺前の人家で流行病が発生したことや、避病院を建設して患者を治療する計画となったこと、矢作や他の役人らが村民に静まるように申し諭したことが記されている。悪病除けのため鎮守に神酒を供え、酔って高声を発したかに思われる者もいたが、村民は申し諭しに従ったとある。



15.『虎列刺病予防仮規則』

慶應義塾図書館所蔵 明治12(1879)年

明治12(1879)年のコレラの大流行を受け、太政官が同年6月27日に公布した規則。展示部分の内、第11条では、孤独・貧困で看病人を雇えない者、家人が幼かったり老衰していたりして看護・消毒が行き届かない者、家人が外で働いて他に引取人がいない者、病毒の伝播を防ぎにくい環境に身を置く者は、避病院に送るべきとされている。また、第13条では、コレラ患者のいる家は、その病名を大書して門戸に貼り付け、原則として他人の出入りを謝絶すべきとある。



16. 石黒忠恵『虎烈刺論』

慶應義塾図書館所蔵 明治4(1871)年

著者の石黒忠恵(1845~1941)は、幕府の医学所で学んだ経験を活かし、明治初年に大学東校に勤め、続いて兵部省軍医寮に入り、軍医制度の確立を担った一人。本書は、当時大学東校にあった彼が、ドイツの医学書から病病とコレラ病の論説を抄訳してまとめたもので、同校から刊行された。ドイツの先進的な医学の成果を日本国内に発信しようとした啓蒙書としても注目される。



第Ⅱ部

薬学の発展

江戸時代における薬学の発展と言えば、本草学(薬物学)や蘭学が連想されるかもしれない。時期的には江戸時代中後期がメインとなるだろう。しかし、それ以前の薬学の発展も無視できないもので、中後期の基盤が形づくられたと言える。その背景は何だろうか。

江戸時代前期には、それぞれの身分で家という共同体が形成され、一人一人が健康を保ち、家業に従事して、家を存続させることが一層重要となった。こうした中で、薬学や健康法(養生)への関心も高まり、それに応えようとする医者・本草学者などの活動が盛り上がりを見せた。

彼らの活動は、薬学や健康法に関する書物としても結実した。中国の先進的な本草書も、日本国内の読者に向けて出版された。これらの書物の知識を民間に浸透させる上では、村や町の役人を務めたような上層民衆の役割が大きかったものと考えられる。

以下では、江戸時代前期の薬学の発展をいくつかの書物から跡付け、そこから中後期を展望してみたい。



17. 曲直瀬道三『薬性能毒』 慶應義塾図書館所蔵 寛永6(1629)年

曲直瀬道三『薬性能毒』の初期の版本。様々な漢方薬の性質や効能がまとめられている。展示部分の右側は目録の末尾で、左側からが本文となる。本文冒頭の莎(香附子【こうぶし】)の部分を見ると、上段にアマシ(甘い)、微寒(熱を軽減する)、トクナシ(毒なし)として薬物の性質が記され、下段には、鬱を開き、気を快くし、頭痛、上気、胸の塞がり、呑酸【どんさん】(胃酸逆流)、虫積【ちゅうしゃく】(寄生虫による病気)、婦人の気病、帯下【たいげ】、発汗に効くとの説明がある。

18.『霊宝薬性能毒』

慶應義塾図書館所蔵 享保5(1720)年

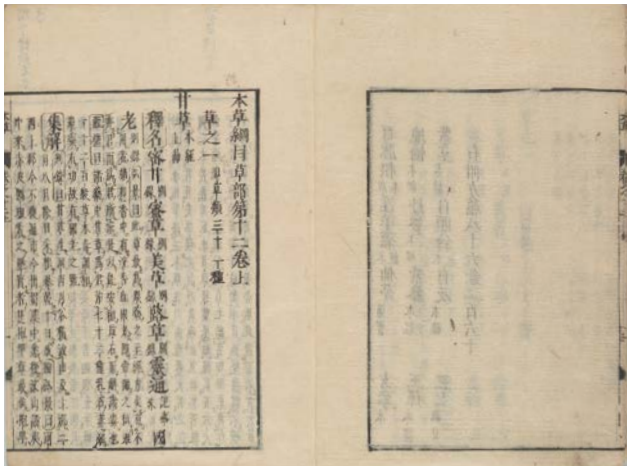


19.『和語薬性能毒』

慶應義塾図書館所蔵 享保18(1733)年



江戸時代には『薬性能毒』の類書も数多く出版された。例えば、万治2(1659)年には薬物の掲載順を変え、解説を増補して読み下し文とした『増補薬性能毒』が出版された。元禄11(1698)年刊の『増補霊宝薬性能毒』では薬物がいろは順で掲載されている。また、享保期には薬物を和文(漢字・平仮名交じり文)で解説し、挿絵を入れた『霊宝薬性能毒』『和語薬性能毒』が出版されており、今回の展示史料に加えた。このような類書の出版の背景に、江戸時代中期における読者層の拡大が想定されよう。

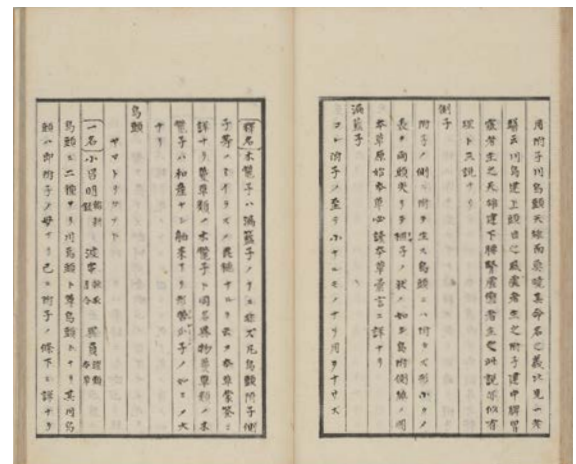


20. 李時珍『和名入 本草綱目』 慶應義塾図書館所蔵 寛文12(1672)年

中国の本草学(薬物学)の代表作である李時珍『本草綱目』全52巻(1596年刊。付巻あり)を寛文12(1672)年に日本で出版したもの。薬草などの和名が一部補われると共に、解説部分に訓点が施されており、日本の読者に向けた積極的な情報発信となっている点が注目される。本書の内容は多岐にわたるが、薬草ともなる植物を解説した巻(草部 草之一)、それと対応する絵図の巻を選んで展示した。

21. 小野蘭山「本草綱目啓蒙」 慶應義塾図書館所蔵 江戸時代後期

江戸時代後期の本草学者の小野蘭山による『本草綱目』の講義録「本草綱目紀聞」の内容を整理したもの。初版は享和3(1803)年から刊行され、以後、版を重ねている。本企画展では、幸田成友文庫の写本(手書きの本)を出品した。書物の流布は、版本によるものだけでなく、写本によるものもあった。展示部分(第13巻)には「鳥頭」(トリカブト)が見えるが、薬物の知識は毒物の知識とも関連が深かった。



22. 貝原益軒『養生訓』 慶應義塾図書館所蔵 正徳3(1713)年

貝原益軒が養生の秘訣を詳しくまとめたもの。展示部分では、四民(士農工商)ともに家業をよく務めるのが養生の道であるとされ、暇でなければ養生は難しいという考えが批判されている。このような主張は、体を動かして「気」(「元氣」)をめぐらすのが養生の術だからという根拠によって支えられ、予防医学的な議論として説得力を持ったようである。

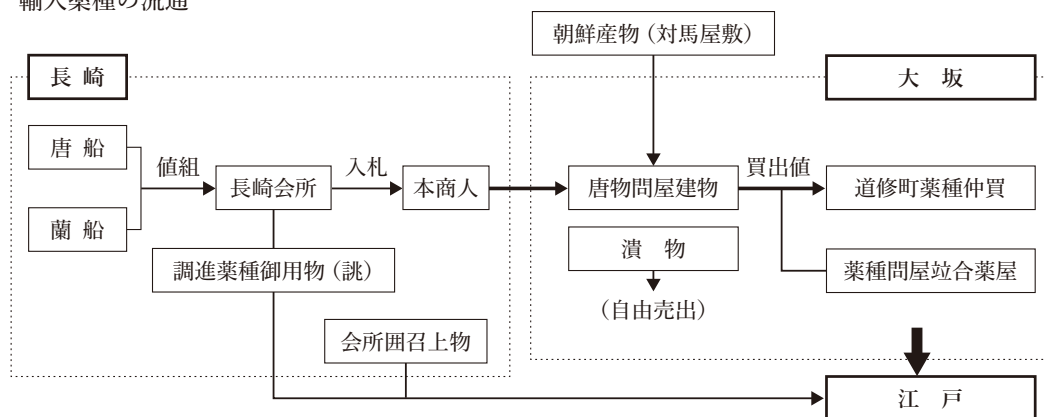


薬種の輸入と流通

江戸時代に輸入された薬種は、長崎において唐船・蘭船などから購入したものと、対馬藩を介して朝鮮から輸入したものが多かった。朝鮮から輸入された朝鮮人参は高級な薬として今日も知られている。

このうち長崎に船載された薬種は、まず長崎会所によって値組され「元値」が付けられる。これに対して、五ヶ所本商人が入札を行い「払値」が決定した後、大坂の薬種仲買仲間による入札が行われ「買出値」が決まり、薬種仲買仲間の手を経て全国に流通した。

輸入薬種の流通



(宮下三郎(1997)『長崎貿易と大阪』清文堂、252頁「輸入貨物流通図」を参照)

長崎で本商人が落札した貨物は、封印して手板という内容証明書に宿老の割印を受けて、大坂の唐物問屋に送った。大坂に届いた薬種は、大口の「建物」と小口の「潰し物」に分けられ、潰し物は入札されず自由売り出しができたが、「建物」の方は、売り出しを行う問屋が、売り出し日に売買双方立会いの上で貨物の蔵出しを行い、手本荷（見本）の封印を切った。その上で、薬種仲買仲間が値入れを行い、その平均価格の算定を仲間全員が確認した上で問屋行司に交渉し、仲間一同の総意による買出値を決定する仕組みになっていた。

このような輸入薬種は、主に大坂道修町の薬種仲買に代表される唐薬問屋を介して国内流通が統制され、江戸など全国に流通した。江戸における薬種流通の中心は本町周辺で、その賑わいは『江戸名所図会』にも描かれている。江戸に送られて来る薬種には、輸入薬種である「唐薬種」の他、国産の「和薬種」があり、それらのなかに偽薬種が紛れこまないように享保7(1722)年に改会所が設けられたこともあったが、元文3(1738)年には廃止され自由な売買が許可された。そのため薬種は問屋以外の素人も勝手次第に売買でき、広く庶民に普及することとなった。そのため常備薬や旅の必携として庶民に広まり、「大山詣」や「伊勢詣」などの流行とともに、関東周辺の村々にも流通していくこととなった。

1 長崎での輸入

長崎商人永見家が入札のために作成した「西洋薬種寄」では、イロハ順に品目名を記し入札順に量と上位三者の価格と屋号を記入している。そのなかには、「ミイラ」や「ユニコール(ユニコーン)」「コーヒー豆」など興味深い商品名が薬種として記されている。

「西洋薬種寄 天保7丙申年ヨリ ユメミノ印」

長崎歴史文化博物館所蔵 江戸時代後期

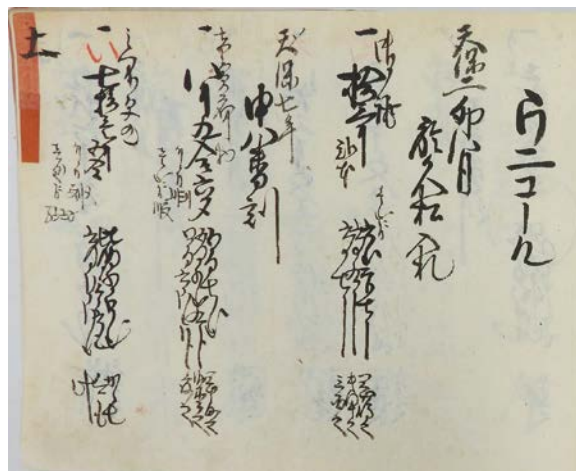
「ミイラ」とは日本語であり、中国では「木乃伊」と記す。「乾燥した人間の肉」のことを、オランダ人は「ムミイ mumie」、「ムミア mumia」、「モミイ momie」と記している。必ずしも人肉ではなく、馬肉で作ったものもある。止血薬として用いられた。



「西洋薬寄 天保7丙申年ヨリ／ラ, ム, ウ印ノ部」

長崎歴史文化博物館所蔵 江戸時代後期

「ユニコール」とは「ユニコーン」が訛ったものである。「ウニコウル」と記されることもある。すなわち海獣の一種である一角獣の牙のことである。解毒剤として用いられた。残念ながら伝説の動物のことではない。

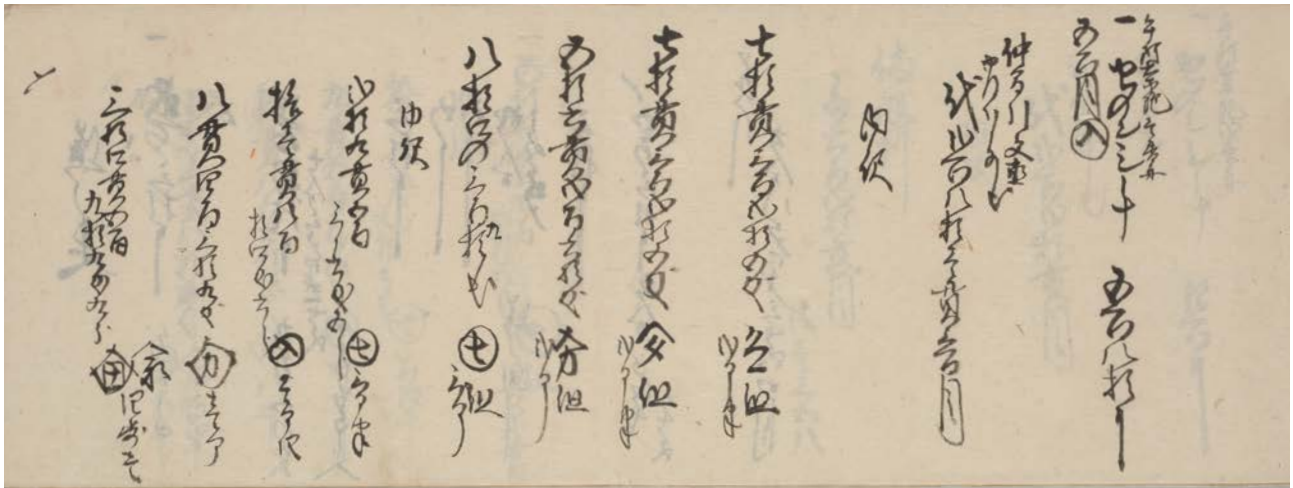


「西洋薬寄 天保7丙申年ヨリ／フ, コ印ノ部」

長崎歴史文化博物館所蔵 江戸時代後期

「コーヒー」は、原産地エチオピアからアラビア半島を経由してヨーロッパに伝わった。ヨーロッパでも17世紀までは薬であった。緒方洪庵訳述『虎狼痢治準』には、コレラ治療のために、中枢神経を興奮させる揮発衝動剤として「骨喜」(コーヒー)を挙げている。





23.「午阿蘭陀相對控」

慶應義塾大学古文書室所蔵 安政5(1858)年10月

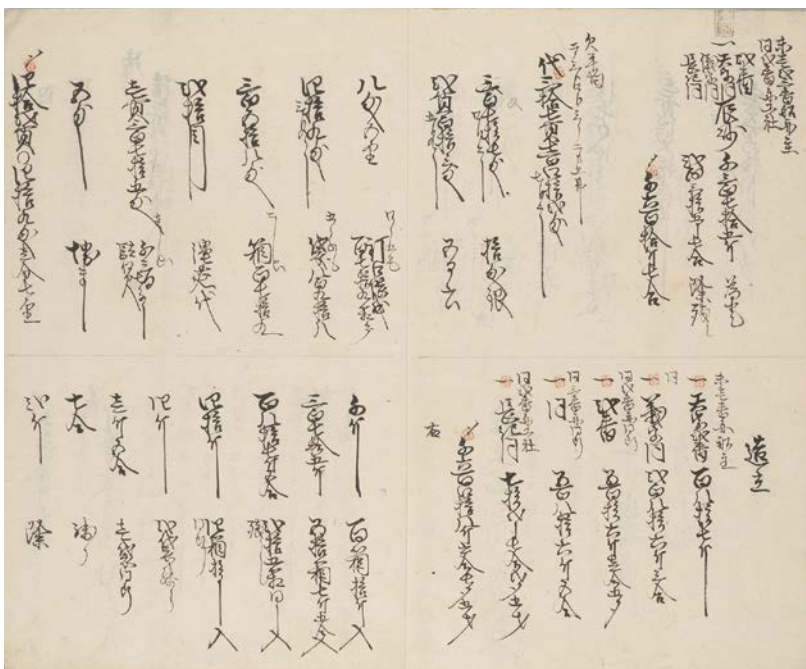
ここで取り上げた「午阿蘭陀相對控」は、安政5年(1858)にオランダ船がもたらした輸入貨物の取引に関する覚書であり、商品名・価格・数量などが記されている。展示した部分に記されている「セメンシーナ」は、回虫駆除薬として使用された。近世を通してオランダとは長崎で貿易していたが、開港に伴い相対での取引が行われたことを示し、そのなかでこのような薬種の輸入が積極的に行われていたことが分かる。



24.「覚(サフラン代金)」

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵 江戸時代後期

長崎の貿易商人永見家が、取り扱った西洋薬種は多様である。サフランはアヤメ科の多年草およびその雌しべを乾燥させたもので、現在ではよく香辛料として使用されている。生薬としては「番紅花」(「蕃紅花」とも記す)と呼ばれ、鎮静、鎮痛、通経作用があるとされている。



25.「末式番割浜着勘定帳」

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵 江戸時代後期

長崎における輸入貨物には、反物などの他、薬種として麝香、犀角、羚羊角、水銀、辰砂などが含まれている。このような鉱石や角なども薬種とされていた。展示した部分は、「辰砂」の取引を記している。辰砂は鮮やかな赤色の鉱物で「丹」と呼ばれた硫化鉱物である。水銀の精製に使われる他、古来朱色の顔料や薬としても使用された。別名「賢者の石」とも言われたもので、不老長寿の霊薬としても知られている。

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵 江戸時代後期

已未春判
 山崎
 貞
 改土池
 古
 野口
 水

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵 江戸時代後期

永恩橋出願中々大費
 七拾陸圓大坂賣主
 其相前所日金銀器賣
 出賣地所屋敷年出賣
 出賣主
 其相前所日金銀器賣
 出賣地所屋敷年出賣
 出賣主

2 朝鮮人参の輸入

朝鮮人参は、ウコギ科ニンジン属で学名を *Panax ginseng* と称す。薬効は、疲労回復・消化促進・精神安定・免疫機能の改善等々。まさに万病薬として、日本でも古代から貴族階級の間で知られていた。これが近世に入ると、人参の使用が飛躍的に増大する。理由は、原産地朝鮮半島との貿易が安定したこと、また朝鮮医学の最高峰とされる許浚^{ホジュン}撰『東医宝鑑』(25巻1613年刊)が開版後間もなく日本へもたらされ、これが人参の多用を推奨した書物であったことから、いつしか薬剤処方が人参偏重に陥ったともいわれる。

人参は、江戸時代12回来日した朝鮮通信使の献上目録に必ず記載され、将軍への貴重な贈り物であった。いっぽう販売用的人参は、総て対馬藩が朝鮮釜山の倭館で輸入したものである。当時の貿易帳簿によると、年間輸入量の最高記録は元禄7(1694)年で6,678斤(約4トン)、この対価として慶長銀2,146貫目(金35,000両)が支払われている。ただし当時的人参は山中に自生する「山参」であったため、気候の変化による収穫量の増減が激しく、輸入量も常に不安定であった【表1】。

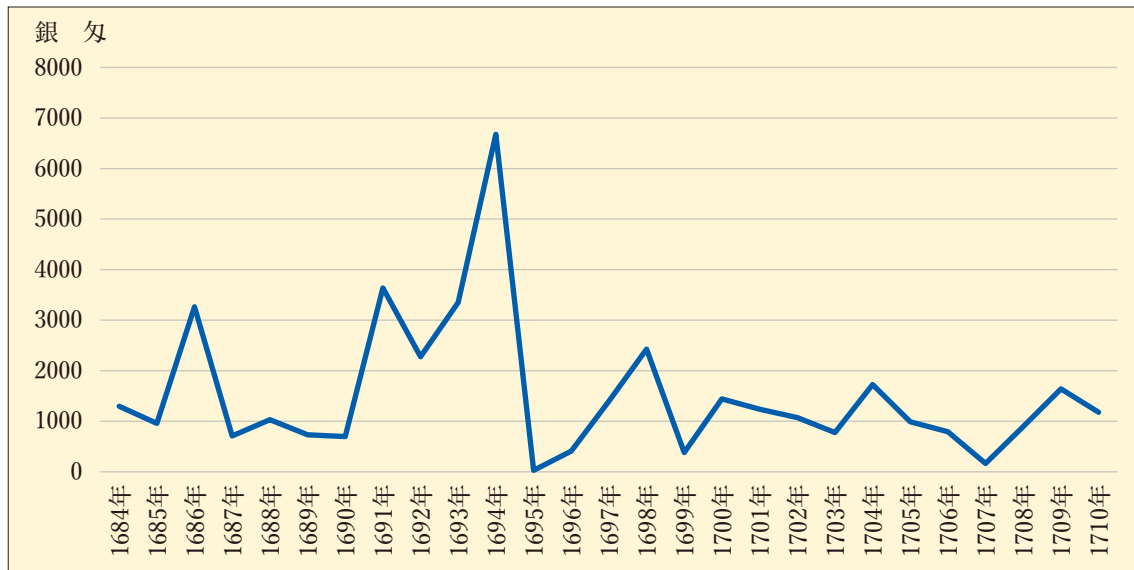
庶民用的人参は、幕府への政治的配慮からその8割が江戸へ運ばれ、藩直営の人参座で専売された。当初、買い手に制限は無かったが、需要の増大に伴って投機買いする者が出てきた。そこで元禄3(1690)年、幕府は対馬藩へ以後の座売は「証文売り」とするよう命じ、さらに江戸(後に京都・大坂)に町触を出し、購入希望者の身分保証ができる者(例えば名主)の印鑑を予め人参座へ届けさせ、購入の度毎に病人であるという証文の持参を義務づけた。

しかし座売人参の価格は、元禄8(1695)年以降頻繁に行われた貨幣悪鑄の影響を直に受け、上昇する一方であった。最低品位20%(宝永四ツ宝銀)まで落とされた劣悪な銀貨は、倭館市場で受け取りを拒否され、輸出銀不足は人参輸入量の激減を招いた。人参価格の騰貴を抑えるべく、朝鮮貿易用の良質な貿易銀「人参代往古銀」の対馬藩への交付が決定したのはまさにこの悪鑄時代の最中、宝永7(1710)年のことである。これを許可した老中土屋政直の言葉に「世上御救之事ニ候故」*とあり、それが万民救済の道につながると確信したからに他ならない。幕府の破格の対応により、座売値は享保期(1716~1736)まで一定額を維持することができた【表2】。

対馬藩の独占下にあった朝鮮人参は、8代将軍徳川吉宗(1684~1751)によって劇的変化をとげる。吉宗は将軍職就任後間もなく、朝鮮医書『東医宝鑑』を得て、これを安価に入手できるよう和刻版の開版を命じた。さらに対馬藩へは、移植用的人参生草を数回にわたって江戸へ運ばせ、朝鮮と気候風土が似た日光で人参試作を開始させた。試行錯誤の末、元文3(1738)年江戸で種子を販売できるまでになり、やがて日本全国へと人参栽培を拡げていった。日本に根付いた朝鮮人参は、種子が原産地のものと同一であること、それを将軍自らが先導したことから「御種^{おたね}人参」と称す。それは幕末期、外貨獲得のための主要輸出品目として東アジア世界の人参市場を席捲していくことになる。

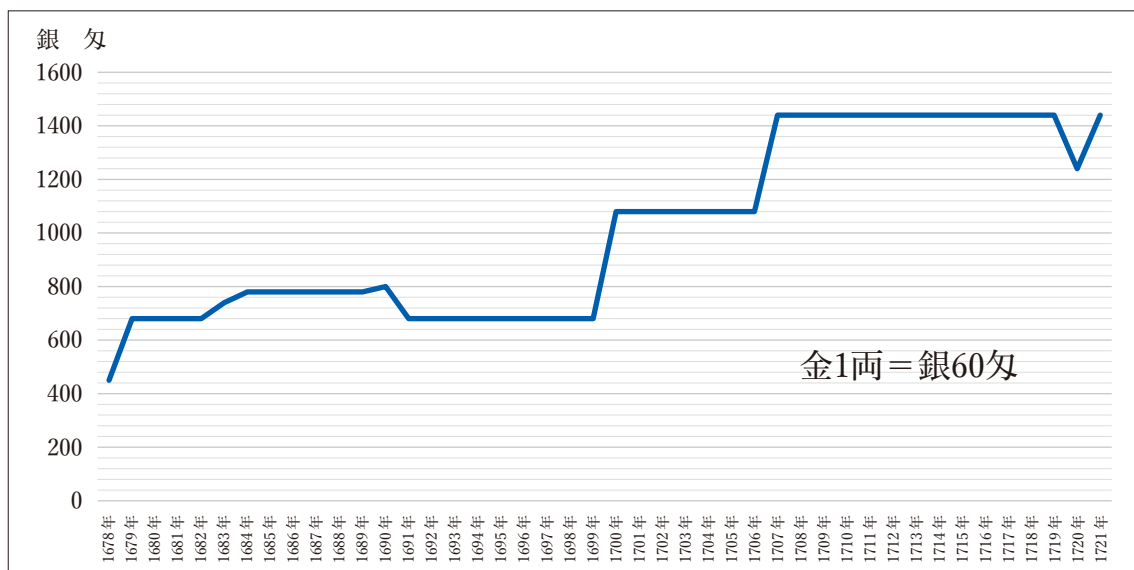
* 宗家記録『朝鮮渡銀位御願之通往古銀被蒙仰候記録』(国立国会図書館所蔵)より

表1 朝鮮人参の輸入高(1684~1710年)



宗家記録『御商売御利潤并御銀鉄物渡并御代物朝鮮より出高積立之覚書』(国立国会図書館所蔵)

表2 江戸人参座小売価格(1678~1721年)



宗家記録『人蔘始終覚帳』(東京大学資料編纂所所蔵) 今村頼『人蔘史』3巻 254~257頁

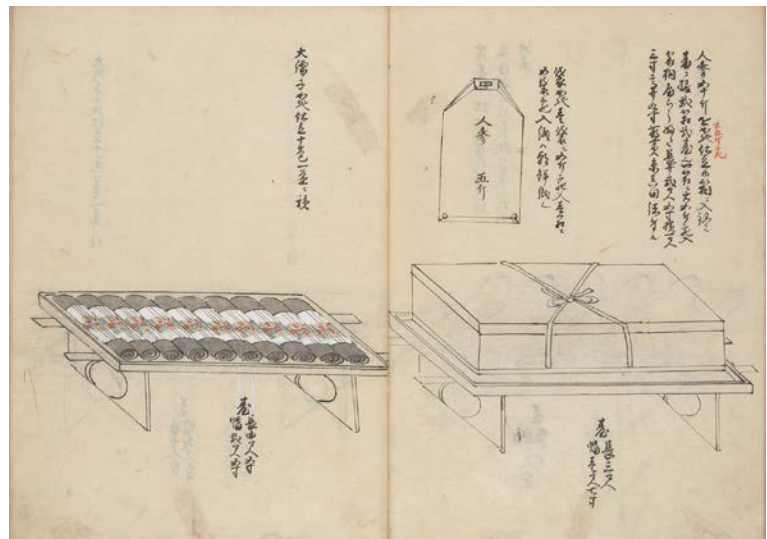


にんぎょうにんじん
28. 人形人参 重要文化財
 九州国立博物館所蔵 正徳3(1713)年

人参は、人の形に似ているものを尊ぶ。そこに神が宿り、薬効があると信じられている。ただし人形のような人参が採れる確率は、一万分の一しかないといわれている。その中でも珍品とされるのが、対馬藩宗家に伝わる人形人参である。箱の上包みによると、正徳3(1713)年人参の斤量改めの際偶然に発見され、家老平田隼人から藩主宗義方【そうよしみち】(1684~1718)へ献上したとある。少し微笑んでいるような顔の表情もさることながら、これ程見事に五体満足揃った人参は珍しい。

29. 宗家文書『通信使記録』
「朝鮮国王より日本公儀江別幅并三使自分献上物」 重要文化財
 慶應義塾図書館(貴重書室)所蔵
 正徳元(1711)年

朝鮮人参は、江戸時代12回来日した朝鮮通信使からの贈り物として、極上品が将軍へ献上された。数量は、元和3(1617)年20斤・寛永元(1624)年100斤・文化8(1811)年33斤を除いて毎回50斤と定められ、5斤入りの小袋10包を葉籠【やろう】という携帯箱二箱に入れて献上された。図の説明書に指示されているように、箱の素材は桐、そこに萌黄【もえぎ】色(黄色がかった緑色)の真田紐(組紐)をかける規定になっていた。



30. 人参代往古銀
 日本銀行金融研究所貨幣博物館所蔵
 宝永7~正徳4(1710~1714)年

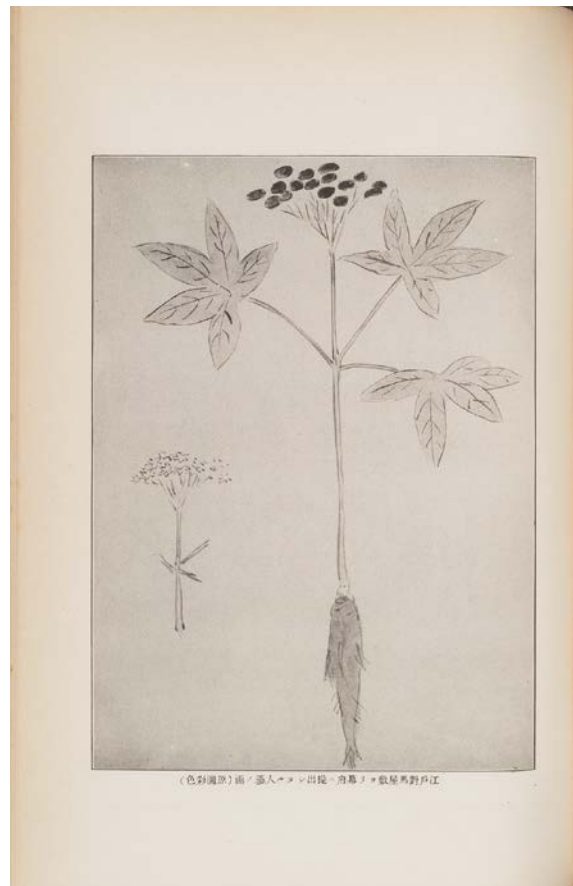
日本銀行貨幣博物館に、「人参代往古銀」という珍しい名前の銀貨が展示されている。これは宝永7(1710)年より毎年1417貫500目(約23,000両)銀座で鑄造された品位80%の良質銀貨である。そのころ日本は萩原重秀による悪鑄時代であり、朝鮮側に日本銀の受け取りを拒否されたことから、対馬藩が特につけあい、往古銀(慶長銀)と同位の、それも朝鮮人参の輸入促進を目的に、鑄造・輸出が許可されたものである。当時の朝鮮人参の異常な人気を、この一枚の銀貨が物語っている。



いまむらとも 31. 今村鞆『人蔘史』全7巻

慶應義塾図書館所蔵 昭和14~15(1939~40)年

今村鞆(1870~1943)は、朝鮮半島各地で警察署員として勤務するかたわら、民俗学関係の書籍を数多く出版した。退職後朝鮮史編修会の嘱託となり、当時朝鮮総督府が宗伯爵家から買い上げた宗家文書に接する機会に恵まれ、朝鮮人参を中心とする大著『人蔘史』全7冊を完成させる。「第四巻人蔘栽培篇」では、八代將軍徳川吉宗の命により、享保4(1719)年対馬藩が老中久世大和守へ提出した「人蔘根葉之図」を写真紹介し、その2年後移植用の生草献上を契機に、朝鮮人参国産化の時代が到来したことを明らかにしている。



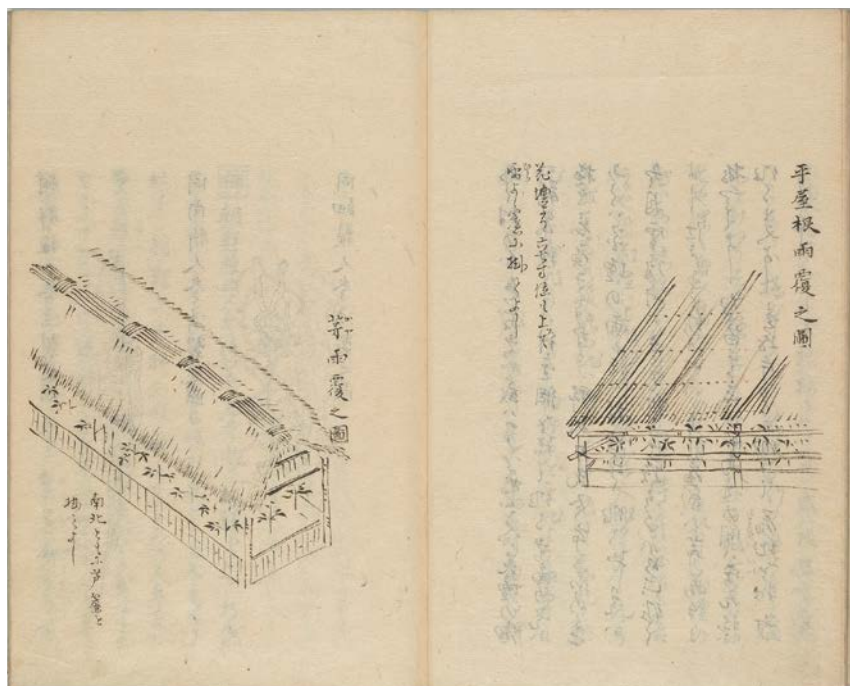
たむらんすい 32. 田村藍水『朝鮮人参耕作記』 慶應義塾図書館所蔵 寛延元(1748)年

田村藍水(1718~1776)は江戸の町医師で、阿部将翁【あべしょうおう】から本草学を学び、元文2(1737)年お種人参20粒を下付されて人参栽培の研究に取り組む。『人参耕作記』は、独自の栽培技術をイラスト入りで平易に説明したもの。「土拵之図」は、人参が黒土を好むこと、また湿気対策とモ

グラの害を防ぐため、土床を高くするよう奨励する。「雨覆之図」は、直射日光を防ぐため、葉の大きな植物を南に植える(左側)か、黒塗りの茅で南側を平屋根で覆う(右側)方法を紹介している。



つちこしらえ
「土拵之図」



あめおい
「雨覆之図」

3 江戸周辺における薬種流通

江戸における薬種流通の中心は本町周辺(現・東京都中央区本町・日本橋室町界隈)であった。大坂から運ばれた和漢薬を荷揚げする河岸があり、陸路の拠点である日本橋に近く地の利があった。その賑わいは天保期に出版された『江戸名所図会』に描かれている。

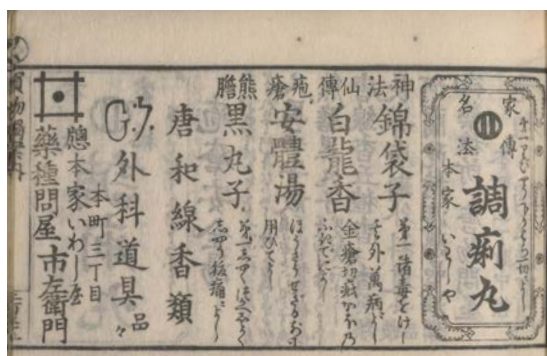
江戸の普請が始まった頃に、小田原の薬種商益田屋が本町に移り住んだ後、上方の「鰯屋」が家伝薬「調痢丸」の販売を始める等、大坂・京の薬種商が店を出すようになった。こうして本町周辺に薬種問屋街が形成された。

江戸本町周辺以外でも、各所に売薬を扱う店があった。文政期に刊行された『江戸買物 獨案内』^{え ど かいものひとりあんない}には延べ200以上の薬種店とそこで販売された薬の広告が掲載されている。広告に提示された効能書きからは、加齢による疼痛、胃腸病、小児病、婦人病、眼病、歯痛などの日常的な病や健康不安に対処する薬へのニーズが庶民の間で根強かった様子が窺い知れる。万病に効くとうたわれる常備薬や伊勢土産で知られる「万金丹」^{まんきんたん}などは、江戸の人々の間で評判となっていたようだ。



33.『江戸名所図会』一巻 齋藤長秋編輯 長谷川雪旦畫圖 慶應義塾図書館所蔵 天保5~7(1834~1836)年刊

江戸本町三丁目にあった薬種問屋鰯屋の店先が描かれる。「薬種 鰯屋」と記された袋看板のほか、「調痢丸」「白龍香」等の薬品名を記した看板が掲げられる。向かいの店先には「返魂丹」の看板が見える。本町界隈は江戸における薬種流通の中心地であった。



34/35.『江戸買物獨案内』巻下 中川芳山堂[中川五郎左衛門]編 国立国会図書館デジタルコレクション 文政7(1824)年刊

鰯屋の広告には、家伝の妙薬「調痢丸」のほか、万病薬「錦袋子」、傷薬「白龍香」、瘡瘡用の「安體湯」、腹痛に効く熊胆の「黒丸子」が挙げられる。通りをはさんで鰯屋の向かいにあった大坂屋では、疼痛や胸のつかえに効く「返魂丹」が売られていた。

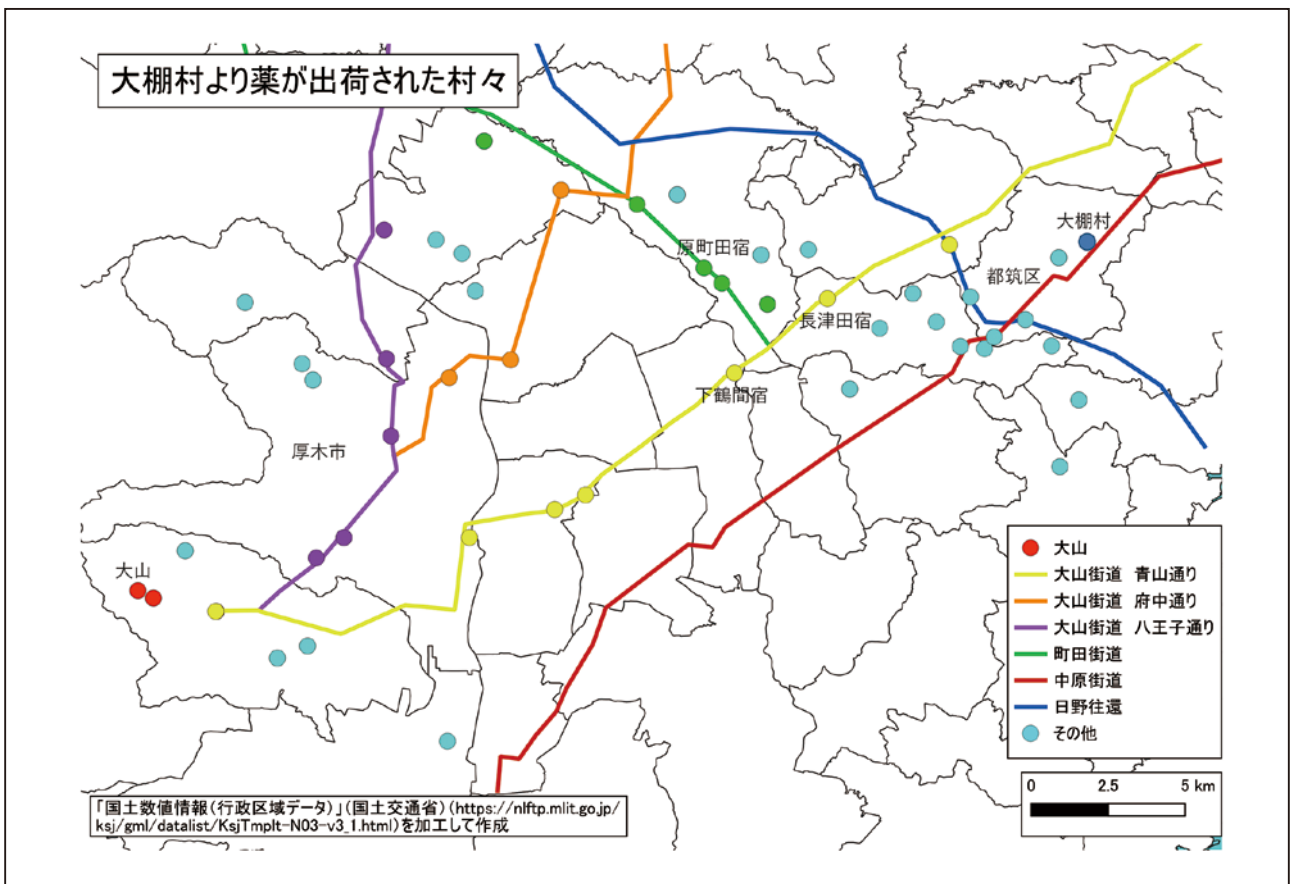


39. 武相薬卸帳

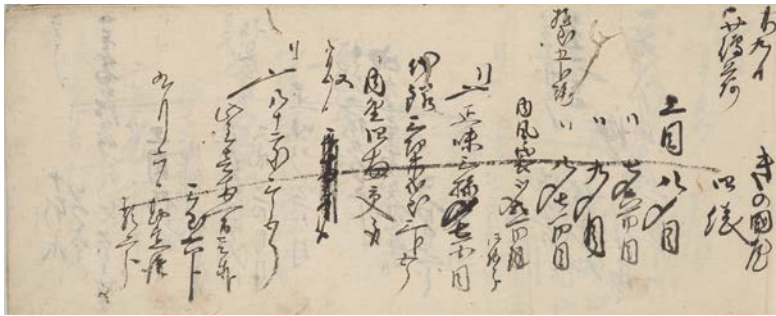
慶應義塾大学文学部古文書室所蔵
弘化4(1847)年

武蔵国都筑郡大柵村(現神奈川県横浜市港北区)に伝わっていた資料である。史料内には取引を行った月日と品物の量、相手の商人名が記載されている。品物は「錫入・丸・目薬・虫治」と大別されている。「錫入」は、錫製の缶などに詰めて販売された軟膏のようなものと推測される。「丸」は丸薬、「虫治」は虫刺され、あるいは腹痛等を治す薬が。

「武相薬卸帳」よりみる大柵村大久保家の取引先地図



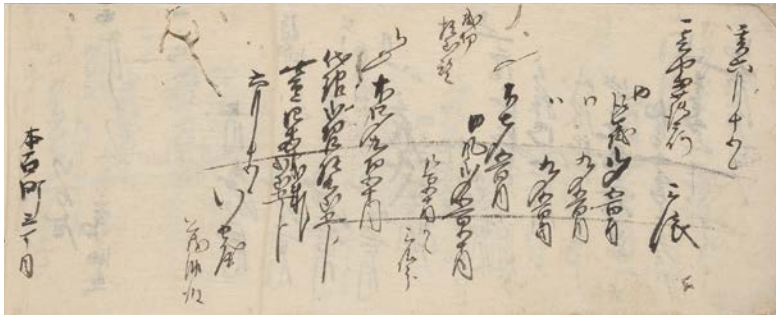
薬の流通は、江戸や大坂だけで行われていたのではない。図は武蔵国都筑郡大柵村(現神奈川県横浜市港北区)の大久保佐七が、弘化4年に薬を販売した村を示したものである。これらは、町田街道や大山街道、中原街道や日野往還などの街道沿いに多くが集まっていることがわかる。また大山内の町とも薬を取引していたことから、大山に参詣する人を対象に販売していた可能性が高いと思われる。



40. 和蘭薬^{ひかえ}扣帳

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵
文久元(1861)年

武蔵国都筑郡大柵村(現神奈川県横浜市港北区)に伝わっていた史料である。和蘭とあるように、オランダなどから輸入していた薬種を扱っていたのであろう。史料内には当時から薬の材料であった薄荷を江戸の間屋7軒に対して取引している様子が見られる。また、「出島薄荷」と書かれた商品もあり、長崎から輸入された薄荷も商品として含まれていたようである。



41. 久寿理帳

慶應義塾大学文学部古文書室所蔵
文久2(1862)年

武州比企郡鳥羽井新田(現在の埼玉県比企郡川島町)で、船の回漕を仲介する河岸問屋を営んでいた梅澤新五郎が購入した薬の種類が記された帳面である。表紙には「久寿理帳」と記載されているが、「くすり」と読む。縁起の良い漢字をわざと当て字として使用することで、病気の平癒を祈願していたのであろう。



慶應義塾大学文学部古文書室2023年度企画展

「古文書にみる病と薬」図録

主催 慶應義塾大学文学部古文書室

協力 慶應義塾図書館

解説執筆

小山幸伸（慶應義塾大学文学部教授、同学部古文書室室長）【テーマ3】

上野大輔（慶應義塾大学文学部准教授、同学部古文書室副室長）【テーマ1・2】

重田麻紀（慶應義塾大学文学部古文書室研究員、萩市立須佐歴史民俗資料館特別学芸員）【テーマ1】

藤井典子（慶應義塾大学文学部古文書室研究員、同学部非常勤講師）【テーマ3】

細田圭佑（慶應義塾女子高等学校非常勤講師）【テーマ1】

藤村彩香（慶應義塾大学文学部古文書室スタッフ）【テーマ3】

田代和生（慶應義塾大学名誉教授）【テーマ3】

慶應義塾大学文学部古文書室スタッフ

吉岡知輝（慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻修士課程）

発行 慶應義塾大学文学部古文書室

2024年3月5日発行

